

## 私の立教講義20余年－悪戦苦闘の終わりに

廣江 彰

私は1991年4月1日から立教大学の教員となった。立教20余年の印象に残るひとつは、よく言われるように「学生がまじめになった」ということであり、その証に講義出席率の高さがある。出席率の高さは、時にはベテラン教務課職員の経験則をも超えるらしく、2013年度前期、私が担当する学部中小企業論講義では受講生が座席から溢れ、通路に座って受講するというヨーロッパの大学並み教室風景を醸し出すこととなった。この有様、当然学生による授業評価アンケート調査では批判が集中し、夏の暑苦しく学生が溢れる教室を変更しない教員はけしからん、との書き込みが多かった。

「学生がまじめになった」ことは、時に揶揄されるが、私は良いことだと思っている。もちろん、出席は教室の席に座っていることではなく、講義中に頭を働かせていてこそ意味がある。出席に意味を持たせるのは当然学生本人のすべきことだが、講義を担当する教員の役割はまして大きい。その点で、私の立教20余年は思い残すことだらけだ。以下、その反省の弁でもある。

立教に赴任して2年目、受講生にリポートを課したことがある。提出されたり報告の質が余りに低いので、私はリポートについて面接を行うと受講生に宣言し、120名余りのリポート提出者のうち、面接に現われた80名以上の一人ひとりに説明を行った上で書き直しを命じた。翌年度の中小企業論履

修者は三桁から二桁前半にまで落ち込んだ。

この経験から私が学んだのは、考えること、学ぶことの楽しさをどのように学生に伝えるかは、その手法も大切だということである。そこで、学生参加型の講義をゲストスピーカー（GS）によるオムニバス形式で、しかも正課科目として行う立教大学初めての試みを、経済学部講義で実施しようと考えた。たまたま私が新宿区の長期構想策定にかかわっていたため、区の資金を得てGS謝金に充てる企画寄附講座を1997年から始めた。同時に、受講生から希望を募り、夏期一ヶ月以上のインターンを有給で始めた。これも立教の初めて。初めてのことには、多くの場合反対がある。オムニバス形式の通年正課科目も、当時の経済学部長老教員（今、私がこの年齢に達したのだが）からは「君は自分の講義に自信がないのかね」と批判された。一言一句そのままである。私は長老教員に「いえ、GSを講義にお招きするのは自信があるからです」と告げた。

その翌年1998年度からは企画寄附講座第二弾として、日本開発銀行（当時）の資金と支援を得て「会社をつくる」を立ち上げた。その顛末や反省点は雑誌「立教」（第166号）や「日本経済新聞」（2004年3月6日付）に書いた。理念は学生参加型講義を通じて考える学生を創る、そのプロセスとして講義を位置付け、講義を構想し最適なGSをお招きして受講生自ら学んでい

ることの意義を体感できるようにする  
というものだった。当時、経済学部教  
授会で、「即戦力」ではなく、また  
「課題解決型」でもなく「学生が『人  
生の基盤』をもって自ら社会の改善に  
貢献出来るようになることへの手助  
け」を行うことがこの講義の目的と私  
は説明している。

「全学共通カリキュラム」（全カ  
リ）が始まるのは1997年からである。  
私が全カリにかかわったのは、学部で  
上述のような試みを行っていたからだ  
と思う。経済学部の教員が担当して  
いた全カリ総合B「仕事と人生」のひ  
とコマだけを、2001年度から数年間担  
当した。2001年6月1日、私に与えられ  
た講義テーマは「多様な働き方（2）  
起業の実態」というものだった。私が  
学部で始めた企画寄附講座は「会社を  
つくる」であったが、先に述べたよう  
に、学生に起業をたきつける意図を持  
ってはいなかった。だから、与えられ  
たテーマが私に相応しいとは思わな  
かったが、いつもながら抵抗もせず受け  
入れた。ただし、私は「起業を目標と  
せよ」ではなく、「これからドラステ  
ィックに環境が変化する社会になる、  
それに対してあなた方は『人生の基  
盤』をしっかりと創る必要がある、そ  
のためには問題処理型人間としてでは  
なく、現象の中に課題を発見し、それ  
を解決できる能力を構築することだ」  
と話した。この認識は今でも変わらない。

課題発見型の思考には、絶えず考  
えるという行為が欠かせない。誰もが  
見過ごす現象の中に論理を見出すには、  
継続して考えることが不可欠である。  
さらに、そこから実践課題を組み立て  
ることができれば、それが社会を良き  
方向へ変える力となる。どうしたらそ  
の能力を学生が身に付けられるか。私  
の「発見」は日本語を論理的に使うこ

とである。残念ながら、ようやく辿り  
着いた結論の前には定年退職の看板が  
ぶら下がっている。

ひろえ あきら  
(本学経済学部教授)